

国際関係学における教育方法と内容の展開（下）
- 米学会誌(International Studies Perspectives) 掲載論文サーベイ -

馬 場 孝

静岡文化芸術大学研究紀要抜刷

第10巻 2010年3月

国際関係学における教育方法と内容の展開（下）

- 米学会誌(International Studies Perspectives) 掲載論文サーベイ -

Pedagogy in International Studies: Survey of the Pedagogical Articles in *International Studies Perspectives* 2000-2006 Part II

馬場 孝

文化政策学部国際文化学科

Takashi BABA

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、米国の学会誌(International Studies Perspectives)の創刊号から2006年までに掲載された国際関係学教授法関連の文献サーベイであり、紙幅の関係で分割掲載となった前号に続く後半部分である。前号で設定した類型化に基づき、本号においては、教育内容を所与として方法に工夫を加える授業紹介、教育内容を調査し、国際関係学の内容そのものに批判的な検討を加える教授法について概観する。

This is the second part of a paper that surveys pedagogical articles in *The International Studies Perspectives* journal. Based on the typology formulated in the previous part, this section starts with an inquiry into the teaching methods applied to explain abstract theories and concepts of International Relations (IR). It then goes on to survey the articles that investigate the contents of IR programs and textbooks. It concludes with a survey of articles that critically examine the subject matter of the discipline of IR.

はじめに

1 概観と分類

(1) 概観

(2) 類型化

2 教育方法の適用

(1) A-1 「方法導入型」

i) シミュレーション+ロールプレイング

ii) 事例(ケース)に基づく教育

iii) PBL (Problem Based Learning: 問題解決型学習)

iv) ディベート

v) 情報通信技術

vi) 映画ほか (以上前号)

(2) A-2 「内容伝授」型

「はじめに内容ありき」すなわち、あるテーマをどのように教えるかという工夫の開陳であり、その点が方法の導入に焦点を合わせたA-1型との相違である。方法の導入以前に内容をいかに伝授するかが強く意識されている点がA-2型の特徴である。前者が「方法が内容を見つける」一面を持つとすれば、後者は明らかに「内容が方法を見つける」性格を持ち、しばしば複数の方法が組み合わせられることも特徴の一つである。

このA-2型には、「倫理」を取り上げた(59)や、グローバルな格差の教育方法について話し合われた(16)のような例もある。しかし圧倒的に多いのは、「IR理論」すなわち古典的リアリズム、構造的リアリズム、古典的リベラリズム、制度的リベラリズム、コンストラクティビズムなど、国際関係論における「理論的視

座」を伝授すべき内容とする論文である。そのうちのいくつかを取り上げ、あらましを見てみよう。

(29)は、理論的重要性が広く指摘され、調査研究でも頻用される一方、理解困難、教えるのはさらに困難とされる「コンストラクティビズム(社会構成主義)」を、国際関係論入門クラスでどのように教えるべきか、「講義案」を提示しての実践報告である。理論・研究の場と教育の現場とのギャップを架橋する試みとされる。用いられるのは、「ヨーロッパ連合の成立」「アパルトヘイトの終焉」「化学兵器禁止」という、この100年間に起きた国際政治上の大変革をケースとして取り上げる授業方法である。リアリズムによる政治力学からもリベラリズムによる経済的便益の観点からも説明できない現象が、コンストラクティビズムによってどのように説明可能となるかが示される[(29)17-19]。同時に、国際政治において、いかなる場合、いかなる条件が整えば「理念」が力を持つのかという問題がわかりやすく解説される。

(18)も興味深い。「行動主体たる国家を、“物理法則”に支配されるビリヤードのボールのごとく扱う」という、「構造的リアリズム」へのお決まりの批判を逆手にとり、「芝生の上のビリヤード」の別名を持つ「クロケット(Croquet)」というゲームを授業で用いる報告である。構造的リアリズムのみならず、古典的リアリズム、リベラリズム、ポストモダニズムも「伝授」される。ゲームそのものが国際関係のアナロジーとしてとらえられ、構造的リアリズムへの批判にのっとり、「国家」に擬せられ

るのは「ビリヤード・ボール」ならぬ「クロッケー・ボール」である。そして、ボールの数、プレイヤーの数、ルールを変更することで「ゲーム」(=国際関係)がどのように変容するかを体感する。ゲームの後、教員の指導の下に「内省」とブリーフィングを行なうという内容である〔18〕389-397〕。

(49)も同様に、「古典的リアリズム」を理解するための「じゃんけんゲーム」、「制度的リベラリズム」を理解するための「囚人のジレンマゲーム」、「構造的リアリズム」を理解するためのボードゲーム「ディプロマシー」の活用が紹介される。

「じゃんけんゲーム」はごく単純で、トランプのカードを1枚ずつ持ち、「生き残る」ことを目的に、じゃんけんに勝ったら相手のカードを取り上げるゲームである。ひとしきり終わった後、教師の質問から「内省」が始まる。「なぜ戦ったのか」「目的が<生き残り>なら戦う必要はなかったのではないか」「カードをいくらかたくさん集めても<生き残り>ためにはプラスにならないはずだ」等々の質問が教師から発せられる。学生は、知らず知らずに「戦っていた」自分に気づかされる。そこでホップス『リヴァイアサン』13章「人間の自然状態、その至福と悲惨について」が配布され、次の有名な一節を読みながら、自分の行動や心理状態を振り返る。「すなわち、人間の本性には、争いについての主要な原因が3つある。第1は競争、第2は不信、第3は自負である。第1の競争は人々が獲物を得るために、第2の不信は安全を、第3の自負は名声を求めて、いずれも侵略を行なわせる」⁽¹⁸⁾。ホップスへの誘いであり、古典的リアリズムへの導入でもある〔49〕366-367〕。

次に行なわれるのが、変則的な「囚人のジレンマゲーム」である。全員が輪になり、「裏切り」は全員に対する裏切りとみなす利得行列にしたがいゲームは進行する。途中でルールを変更し、毎回ゲームを行うごとに、投票により1人追放可能という条件を付加する。追放された者は、追放された者同士で輪の外でゲームを継続し得点を競う。結果的に、「協力解」を出し続けるメンバーが輪に残ることになり、輪の外では裏切りを混ぜながらのゲームが進行する。ゲームに先立ち「講義」が行われている場合に

は、この状況で「制度的リベラリズム」との類推が示唆される。すなわち、協力を続ける「輪」こそが「制度」そのものではないか、という類推である〔49〕368〕。中央集権政府が存在しない状況下でアクター間に協力が可能となるのは、アクターの本性が「善」であることによるので、協力を可能とする「制度」の創出によってでもなく、アクター間の相互作用が将来にわたって継続する状況下では、「協力」することが自己利益に合うためである、というのが「制度的リベラリズム」の理論的骨子である⁽¹⁹⁾。理論の想定に擬した状況を創出することで、理論の理解を助けようという工夫である。

(55)は、カードゲームピット(Pit)を用いて、国際政治経済/国際関係論の理論的視座「重商主義/リアリズム」「リベラリズム/ネオリベラリズム」「世界システム論/従属論」を教える試みである。ピットは購入してやってみたが、ルールは簡単でおもしろい。上述のクロッケー同様、ルールを変更することでゲーム内容がどのように変化するかを体験し、アナロジーから理論の理解へと導入する。準備が簡単でかつ良く工夫された授業である。アレグザンダー・ハミルトン(Alexander Hamilton)、デービッド・リカード(David Ricardo)、マルクス(Karl Marx)、レーニン(V.I. Lenin)などの古典的著作からの抜粋、あるいは定評あるテキストを課題として事前に課すことも有効とのことである〔55〕71〕。

その他、(38)は、ツキュディデイスが伝えるペロポネソス戦争でのアテーナイ人とメロス島民との有名な問答に基づき著者が作成した「ロールプレイング」を駆使し、教科書では「両極端」とされるリアリズムとアイディアリズム(理想主義)両方をひとつのシミュレーションを通じて体得する手法を紹介している。(53)もディスカッション、ウェブフォーラム、模擬会議などの体験型学習を通じてIR理論を紹介する試みである。

以上のように、あれこれの方法を動員して「伝授」すべき内容として一連のIR理論は捉えられている。ISPは創刊号の巻頭エッセイにおいて、アクティブ・ラーニングの制約に触れ、古典的著作への誘いという点で伝統的講義スタイルの利点に言及している⁽²⁰⁾。しかし仮にこ

のような方法で学生が、さもなくば手に取ることがなかったツキュディデイスの『戦史』、ホップスの『リヴァイアサン』、マキャベリ『君主論』などを、その一節であれ興味を持って読む機会になるのであれば、そのそれだけでも試みに値する手法であると言える。

3 教育内容の検討

(1) B-1 「内容調査」型

A-1「方法導入型」A-2「内容伝授型」はともに、教育内容そのものを調査、検討、批判の対象にするものではなく、所与のものとして、教育方法との関連や方法の有効性が検討されている点に共通性があった。

これに対して、B-1「内容調査型」B-2「内容批判型」と名づけた論文は、教育内容そのものを調査、検討、批判の対象とする点に特色と共通点がある。前者からみていこう。

教育内容の調査・分析には、教科書分析、カリキュラム分析、そしてすでに一瞥した学会誌分析の3つがある。

(40)は、半世紀前に出版されたオーガンスキー(A. F. K. Organski)の教科書⁽²¹⁾を軸に、現代の5冊のテキスト⁽²²⁾を、理論と事実、変化しない要素と変化する要素のバランスという観点から比較調査するものである。オーガンスキーの教科書の強みは、変化そのものに根ざす理論を提示している点にあるとされる。その変化の根本要因をオーガンスキーは「産業化」に求める。産業化は国家レベルの現象であるが、国際システムレベルの平和と紛争に多大な影響を及ぼす。まず、産業化は国家レベルで政治体制や社会全般に影響を及ぼす。同時に、産業化の進展は不均等であり、国家間の不均等な発展が国際システムレベルでのパワーの変動をもたらす。特に、パワー移行期において、台頭する国家が国力に見合った満足度を得られない場合に、戦争のリスクが高まる。オーガンスキーは国際関係の変化を以上のような論理で説明する。ほぼ同時期ではるかに著名なモーゲンソー(Hans J. Morgenthau)による、今日も版を重ねるテキスト(Politics among Nations)ではなく、オーガンスキーの教科書を引証基

準とするのは、彼の説の妥当性ではなく、理論と事実、不変と変化のバランスが強く意識して書かれた教科書であることが理由としてあげられている[(40) 25-28]。

この論文は筆者の以下の問題関心と重なる。すなわち、時の試練に耐えうるテキストはありうるのだろうか、あるとすれば、どのような内容を備えたものであるか、という問題である。時々刻々変化する国際関係の出来事を追いかけるだけでは、新聞の時事解説と同じになってしまう。しかし、現実には生起する事象を事後的であれ「説明」する力を持たない理論書は、「教典」にほかならない。理論と実証を架橋する枠組みをどのように提示できるのか。比較の結果を一言で言えば、現代の5冊の教科書は、これらの課題に多様な方法で答えようとしていることが示されるのみで、オーガンスキーの教科書との有意な比較はなされず、「理論」と「事実」、「不変」と「変化」のバランスという課題の重要性が再確認されるだけの結論となっている⁽²³⁾。確かに、理論と実証、不変とされる要素と変動する要素とのバランスという問題提起そのものは的を射ていると考えられる。しかし、T・クーンの定義に適用するような「通常科学」の「標準的テキスト」にはほど遠いのが現状であろう。

(32)は、国際関係論の教科書において国際法がどのような扱いをされているかについて、12冊のテキストを取り上げ検討している。12冊のうち4冊は、出版関係者からの極秘ソースによれば、売り上げシェア上位4冊とのことである。分析の結果は、国際関係論とその教育内容に、「国際法」についての教科書における位置づけと認識の変更を迫る内容検討・批判に近いものとなっている。例えば、「地球資源の管理は国際的なルールの発展を必要としている」「貿易問題に管轄権と強制力を持つWTOが、GATTに代わり生み出された」「国際協定の積み重ねによりヨーロッパ連合が創設された」などといったテーマは、重要な国際法分野の問題であるにもかかわらず、国際法という章においては取り上げられることはない。これらは、国際法とは別の章において扱われ、しかも説明において国際法が言及されることすらほとんどない。「レジーム」「ルール」「規範」といった概念での議論

はなされても、国際法分野のトピックであると明示されることは皆無に近い[(32)152-53]。このように、国際関係論入門クラスにおける「国際法」の扱いへの異議申し立てと教科書記述への提案も盛り込まれている。

(43)(61)はカリキュラムの調査・分析である。(43)は、中西部の67大学の学部における国際関係学(International Studies)専攻プログラムを、カリキュラムの「構造化」という基準から調査する。「構造化されたカリキュラム」の要件は以下の3点である。

入学初年度において、当該分野を包括する入門科目(例えば「国際学入門」(introduction to international studies course))が必修であること。

当該分野に関わる「方法論」を習得するコースが必修であること。

最終学年において、当該分野を総括する「卒業研究」コースが必修であること。

で求められているのは、分野の基礎となる共通概念・理論を習得し、分野全体を眺望し、今後の勉強の指針を与えるための必修授業である。同時に、学習内容のみならず在学する教育機関への導人的な役割を果たすこともその授業に望まれている。が必須要件とするのは、国際関係学分野における定性的あるいは定量的な分析手法を習得するための授業である。特定のテーマを選び研究を進めていく上で必要とされるスキルを身につけ、いかなる研究にも不可欠な批判的思考を養成することも期待される。の必修授業は、広範な分野にわたる勉強内容を統合し、習得したスキルを駆使して研究内容をまとめる、論文、セミナーその他の授業である[(43)137-138]。調査の結果は、専攻する学生全員に共通の基盤を用意する「構造化されたカリキュラム」モデルを取る大学は3分の1以下とのことであり、それ以外は、多岐にわたる分野の授業を用意し、学生に選択の機会を多く与える「多様な選択」方式が主流を占めているとのことである。大学院を有する大学に「構造化」方式が多く、宗教的な背景を持つ大学は「多様な選択」方式が多いとのことである[(32)145]。

(61)も同じ基準を踏襲し、全米140大学でのカリキュラム調査・分析を行っている。入

門レベルでの必修科目は97.1%の大学で課している。しかし、国際関係学(International Studies)に特有な、学際的な内容を持つ科目(科目名は、Introduction to International Studiesのみならず、Our World Today, The World as a Total System, Introduction to the World Systemなども含める)を必修とするのは58大学(42.6%)とかなり低くなる[(61)270]。方法論の習得についてはさらに低くなり、何らかの方法論を必修とする大学は22.1%で、さらに国際関係学特有の方法論は3.6%となっている。「卒業研究」については定義を緩やかに設け、最終学年のセミナーを含む何らかのコースの必修、海外留学、卒両論文などを含めて調査している。それによれば、72.1%の大学が何らかの「卒業研究」を課し、内訳としては、卒論が30%、セミナー等が42%、また海外留学は37.6%であった。さらに87%が何らかの語学の履修を学生に課しているとのことである[(61)270-281]。この2つの調査からは、「国際関係学」専攻の学部構成やカリキュラム内容の多様性が浮き彫りにされている。

前述の(51)は、教育の基盤となる研究面に着目し、学術誌をサーベイしたものであった。結論としては、掲載論文でみる国際関係分野の「偏狭性」を(51)は主張する[(51)460]。

最後に、(37)は、ラテンアメリカ7カ国の大学における国際関係論の授業内容ならびに学術誌5誌の掲載論文の調査・分析報告である。ここでは教育における米国産の国際関係理論の直輸入と、学術面におけるラテンアメリカの独自な理論展開という対照的な解明される。従属論のように、過去、ラテンアメリカにおける学術的な理論展開が、北米の議論に貢献した例もあり、今後もその可能性を持つことを示唆している[(37)346-348]。

B-2 「内容検討・批判」型

調査から一歩進み、教育内容や既存の学問体系に検討を加えるタイプである。(31)など教育内容の提言を含むもの、(62)のようにこの分野における「理論」そのものの意味を根源的に問い直すものなど多様であるが、

ここでは、いくつかを例示的に検討するにとどめる。

(7)は、女性性器切除（FGM：female genital mutilation）を題材に、国際関係論（IR）そのものの体系や内容に批判的検討を加えている。世界保健機関（WHO）は、世界で毎年1億3000万人の女性にFGMが行われ、そのうち少なくとも見積もって200万人が生命の危険にさらされていると報告する。この慣習の擁護には、伝統、文化的価値に依拠した議論が展開される。他方、非難する側は、女性の健康への悪影響を指摘し、FGMは女性への人権侵害であり女性に対する暴力の一形態にほかならぬと論難する。他方、この慣習を擁護する地域の女性からは、「西側先進国」の女性による反対運動は、新たな「文化的帝国主義」であるとの反批判もなされる。世界の女性運動を二分する争点にもなっている〔7〕234-235〕。

では、FGMはどのように国際関係論の内容に関わってくるのであろうか。FGM問題は、南北問題、国際法、NGOの国際問題への関与、文化的相対主義と人権の普遍性といった国際関係の様々な側面と深い関わりを持つ。国際関係論にジェンダー的視点を導入するのに格好のトピックであろう。しかし、著者は別のアプローチを採用する。ジェンダーをいかに体系に組み込んでいるかという観点から、国際関係論の様々なアプローチを批判的に検討する事例として、FGMを活用するのである。国際関係論はこの観点から4つに分類される。

ジェンダー・ブラインドの「見ざる聞かざる言わざる」アプローチ

従来の体系は不変のまま取り入れ、隔離して扱う「取り入れ、かき混ぜる」アプローチ

異なった視座を複数同時に提示する「複数パラダイム」アプローチ

ジェンダーの観点から国際関係論を完全に書き直す「ジェンダー国際関係論」アプローチ

この4つの観点から、教科書分析も行われる〔7〕235-241〕。ではFGMは問題の重要性が認識されることはあっても、学問の対象外とされる。では女性への人権侵害の

ひとつとして取り上げられるが、既存の知識への「付録」「追加」としての扱いを受けるのみである。さらに「女性」がひと括りされた単一存在として提示され、階級、経済、地域、人種、民族に基づく相違は顧みられない。政策決定に関与する女性エリートの階級的な背景も、FGMをめぐる「南」の女性間の葛藤も、あるいは「南」と「北」との女性間の緊張関係も議論の射程に入らない。では、複数の視点から異なったFGMへのアプローチが示される。リベラリズムの観点からは、FGMは、人権の国際化における基準（スタンダード）の問題、さらには人権の普遍性と相対性との緊張関係の問題において捉えられる。ポストコロナの観点からは、FGMはイスラムの教義で許されるものではなく、ムスリムでない女性に行われている慣習であるにもかかわらず、イスラムと結びつけたに言説がなぜ多いのかについての問題が提起される。加えて、FGMの問題の議論や活動の過程において、「北」の女性によって「南」の女性が「他者」として対象化され、「物事がよくわかっている私たち（＝北の女性）」による「救済対象（＝南の女性）」という図式がいかに形成されるかが解き明かされる。はさらに徹底する。外資系企業でブルージーンズの裁縫に携わる女性、大農園でバナナの収穫労働に従事する女性、家庭で子どもの世話をする女性、これら「普通の」女性の生活への理解が、国際関係論において死活的に重要であると主張され、FGMもこの文脈で議論の対象とされる〔7〕237-240〕。既存のIR理論への批判と問い直し、そしてジェンダー論をどのように国際関係論に組み入れるかという問題提起がなされている。

(34)は「歴史的アバヴァンギャルド」なる教育手法で、ネオリアリズム的なグローバル化概念の批判を試みる授業紹介である。ネオリアリズム的なグローバル化像とは、われわれの日常生活から切り離され関係のない次元で進行する過程としてグローバル化を提示し、世界経済の構造を、自己疎外を随伴した形で定式化するものとされる。これを打破するには、ISPで先行的に紹介される様々な「工夫（トリック）」を既存の授業方法に加えるだけでは不可能であり、著者が提唱する「歴史

的アバンギャルド」による批判的教授法によって可能となることが示されている〔34〕231-233〕。

この試みは、ロバート・コックス (Robert Cox) による「問題解決型理論」と「批判理論」の2つとも対峙される。すなわち、既存の政治・経済制度や社会的政治的な権力関係の体制を所与のものとして、その枠内での行動と技術的な「問題解決」を模索する「理論」と、眼前の政治・経済制度や権力関係がいかにかに形成されたのかを批判的に検討する「理論」の区別である〔34〕235〕。前者では、「地球的問題群」の解決の必要がしばしば示される。その「問題群」には、様々な「問題解決アクター」が群がる。国家、国際機関、専門家、NGO、擬似 NGO、政府お抱え NGO からなる「群れ」である。「グローバル・ガバナンス」の標題の下、予定調和的に問題の解決が図られ、「地球市民社会」の誕生が高らかに告げられる。この「問題解決型」国際関係理論においては、グローバルな政治と日常生活との分離が前提とされており、問題解決のために目的を一つとする諸集団、諸アクターが「協力」し「団結」する図式が描かれる。リアリズムが国家による国益の合目的追求以外に「政治」を見いださなかったとすれば、「問題解決型」国際関係理論は、政策志向、協調的、予定調和的、同調的な非政治化された市民社会だけを見いだす結果に終わったとされる。

一方の批判理論においては、グローバル化推進エリート、超国家企業等の「グローバルな権力」が抽象的、絶対的に指定され、それに対抗するものとしては、「反ヘゲモニー人」「反システム人」という「幽霊」が出現させられる。「問題解決型」理論にせよ、「批判」理論にせよ、「認識共同体 (epistemic communities)」「脱国家的争点をめぐるネットワーク (transnational issue networks)」「反ヘゲモニー」などの「幽霊」を「国際関係学」に出現させているにすぎないと批判される〔34〕234-236〕。

では、提唱する「歴史的アバンギャルド」手法とはどのような授業であり、教室内でのどのような体験型授業によっていかにグローバル化が日常生活と切り離されないものとして「体感」されるのか。遠近法を発見したダ・ヴィ

ンチの手記、コロンブス、ジャック・カルティエ、ティチングなどの日誌、あるいは「望まなかった旅行」を強いられた奴隷貿易に関する研究書などからの「せりふ」を読み、「劇」を仕立てる授業などが展開される〔34〕238-245〕。これらがどのような効果を持つのか、正直なところ、筆者の理解を超え、また具体的な授業のイメージをつかむことができなかった。しかし仮に著者の主張通りの効果があるのであれば、授業実践を通じた教育内容の批判的組み替えとなっており、興味深い事例である。

(15) は映画を駆使して、国際関係の諸理論を批判的な検討の対象とした授業報告である。『蠅の王』などにより、IRの理論を真偽の判定ではなく、その理論がいかにか「まことしやかに見えるか」「もっともらしく見えるか」について、その仕掛けを探る試みで、内容はきわめて興味深い。「真実」はいかに真実として語られるようになるのか。IR理論も映画も、「まことしやかに見せる」ためには、無視されねばならぬ要素がある。それぞれそれは何であるのか。「流行る仕掛の構造」を解き明かしつつ、映画とIR理論を対置するのである〔15〕282-286〕。「ひどい映画」である『インディペンデンス・デイ』をあえて用いてIR理論を脱構築する(50)とともに、国際関係論において理論とは何かについて、これらの論文は根源的な問いを提示している。

結語に代えて

以上のサーベイで得た暫定的な知見を整理し、気になったいくつかの点を雑感として記して結語に代えたい。

「教育方法の適用」の節で概観したように、国際関係学に関わる教育現場には、「シミュレーション&ロールプレイング」をはじめ多彩かつ斬新な手法の導入が進められている。同時に、それらの普及を促進する教材販売あるいは無料の教材提供の充実にはめざましいものがあつた。

これらの教育手法と教育内容との間には、一定の親和性がみられた。「シミュレーション」で扱われるテーマは、国際機構や外交交渉等が圧倒的に多かった。「事例(ケース)に

基づく教育」で取り上げられるケースは、そのオンライン教材の構成比率や授業実践の事例数から、自国が関わるケースに偏る可能性が推測された。一方、「ディベート」では歴史事象を扱うのは困難であり、論題の設定に時事問題への傾斜が看取される。

以上の教育手法が教育内容を制限したり規定したりするリスクや、学生参加型の授業の導入と学習範囲の限定化とのトレードオフについては、サーベイした論文のいずれにおいても十分に認識されていた。「古典的著作」への啓発的な導入など、従来の講義方式の長所とされる面をあわせ持つ試みもいくつかみられる。さらに、これらの様々な手法と組み合わせられたIT技術の活用も際立った特徴であった。

それではこのような斬新な手法の展開は、教育内容の「制度化」を示唆するのであるだろうか。アクティブ・ラーニングの活発な導入は、教育内容の「規格化」の進行と軌を一にするのだろうか。ディシプリンが確立し、「完成された学問」においては、同じ内容のことをいかに効率よく学習者に習得させるかが「教科書」や授業の目的となる。このサーベイからは、IR理論の教育において、その萌芽が看取された。「同じ内容」をいかにわかりやすく学生に理解させるかの工夫の開陳が多くの教育事例紹介のポイントとなっているのである。他方、教科書分析のいくつかは「標準化」とはほど遠い現状を示している。ディシプリンの統一や確立というよりも、その並列状態がむしろ固定化しつつあるとも考えられる。

アクティブ・ラーニングへのありうる批判の一つは、コックスの「批判理論」からのものであろう。シミュレーション&ロールプレイングにしてもPBLにしても、既存の国際秩序や制度を前提にした上で「問題解決」を図ろうとする「問題解決ごっこ」である。しかもそれらの国際秩序や制度は、まさにアメリカ合衆国を中心とした「制度」「秩序」にほかならない。もちろんサーベイでも見たとおり、ロールプレイングによりグローバル化の現実を根源から問い直そうとする試みもある。しかし、コンピュータ画面上でのシミュレーションや市販教材の多くが、既存の秩序や制度を所与として作成されているのであれば、

国際システム形成の根源やシステム自体に内包する問題に目を閉ざしたままの政策形成志向や問題解決志向の教育に一層の拍車がかかる危惧も否定できない。

同じく、雑感の域を出ないが、サーベイを通じて気になったのは、教育内容における「文化」の不在である。これはアクティブ・ラーニングの方法自体に根ざした問題なのであるか。

ロールプレイングやシミュレーションは、「役者」(アクター)になって「主体」(アクター)を演ずるゲームである。国際関係において、さまざまな主体を主体にまとめあげるのは、つきつめれば「文化」にほかならない。アクターをアクターたらしめるメカニズムの大きな要因の一つは、文化なのである⁽²⁴⁾。この点に目を閉ざして「役者」になりきり紛争解決「ごっこ」を繰り返しても、自文化中心主義の螺旋に陥りかねないのではなからうか。

これは教育方法そのものに内在する制約ではなく、その適用における問題であるとの見方もありうる。仮に、異文化理解を伴う能動的な「ごっこ」が行われれば、大きな強みにもなる。なぜなら、シミュレーションにおいては、同一の争点が、異なったアクターにどのように異なって映るのかを擬似体験できる点にその教育効果が期待されているからである。ディベートも同様である。明快な「論理」によって是非の決着をつける論争の場に、「文化」の入る余地は少ない。しかし、異なった「論理」の存在を浮き彫りにする教育的ディベートの考案も不可能とはいき切れない。「事例(ケース)に基づく教育」のケースも、異なった文化的文脈での「ケース」を適切に用いれば、偏狭な視野からの解放につながると思われる。但し、このような問題意識に裏打ちされたアクティブ・ラーニングの手法紹介は見当たらなかった。IT技術を駆使したシミュレーション教材の開発が文化的要因を捨象してのみ可能であるとすれば、学習効率と学習内容のトレードオフの問題は、この点においてこそ十分に認識される必要があるだろう。

検討した文献中、国際的な交渉や紛争解決における「文化」の重要性を強調していたのは、イスラエルでの教育経験をベースとした

(11)など極めて少数であった。教育内容が、ジェンダー・ブラインドならぬカルチャー・ブラインドに陥り、アクティブ・ラーニングの導入がその傾向に拍車をかけるとすれば、教育の現場が米国であるだけに懸念は募る。政治風刺コミックを教材とした(23)では、米国・イラン関係をめぐるコミックを用いた際、描かれていたホメイニーの顔が誰一人わからず、しかも名前を聞いたことがある学生は30人中わずか3名であったとのことである。「文化」は教育の規格化、制度化そしてディシプリンの確立や純化にとって夾雑物であるかもしれない。しかし文化を捨象して構築される国際関係の理論も教育方法の導入も、その代償は小さくないと危惧される。

注

- 18) ホッブス『リヴァイアサン』中央公論社、1979(1651)156頁。
- 19) Karen Mingst, *Essentials of International Relations*, 3rd ed. W. W. Norton & co., 2004, p. 64
- 20) Mark Boyer et al., "Visions of International Studies in a New Millennium", *International Studies Perspectives*(2000) 1(1) 5
- 21) A. F. K. Organski, *World Politics*, Knopf, 1958
- 22) 5冊のテキストは、検討される順に、Bueno de Mesquita, B., *Principles of International Politics: People's Power, Preferences, and Perception*, Congressional Quarterly Press, 2000. Goldstein, J. S., *International Relations*, 4th, ed. Longman, 2001. Kegley, c. and E. Wittkopf, *World Politics: Trend and Transformation*, 8th, ed. Bedford/St. Martin's, 2001. Ray, J.L., *Global Politics*, 7th ed. Houghton Mifflin, 1999. Russett, B. et al, *World Politics: The Menu for Choice*, 6th ed. Bedford/ St. Martin's, 2000.
- 23) メスキータの教科書は、古今東西、国際関係にかかわるアクターの「戦略的行動」の不変性という視点で一貫している。ゴールドシュティンは、扱う理論もカバーする分野も「何でもあり」で、その包括性に、強みと弱みが宿されている。キグリーは時事性を最大限に追求し、重要事件があるたびに、改訂を重ねている。レイは上述の3冊の中間に位置づけられ、国際関係の展開の確率論的性格を強調する。ラセットらは、「分析のレベル」に「機会と意志」を組み合わせた独自の枠組みを提示し、アクターの選択の結果としての国際関係の展開という側面に焦点を合わせる(40)28-39)。
- 24) 平野健一郎「国際関係論、地域研究、国際文化論より総合的な理解を求めて」龍谷大学第1回国際文化学会大会記念講演 講演原稿(2007年11月9日)

本研究は、平成19年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究費の助成を受けた。本稿は、平成20年10月10

日提出原稿の後半部分に、分割掲載に伴う若干の加筆修正を加えたものである。

追記：前号では付録1において、サーベイ対象のInternational Studies Perspectives 第1巻(2000)～第7巻(2006)のPedagogy分野の掲載全論文に通し番号を付し、一覧で提示した(『静岡文化芸術大学研究紀要』第9巻、62～64頁)。本稿の本文中でのサーベイ対象論文からの引用は、以下の要領でこの文献通し番号を用いて注記している(凡例:[(3):47-49]=文献番号(3)47～49頁より引用)。以下、前号と重複するが、本号の本文中で言及した論文のみ、著者名とタイトル、掲載巻・号数を再録する。付録2は、前号で行った対象論文の類型化を示す一覧表である。

- (7) Stienstra, "Cutting to Gender: Teaching Gender in International Relations," 1(3)
- (11) Cohen, "Living and Teaching Across Cultures," 2(2)
- (15) Weber, "The Highs and Lows of Teaching IR Theory: Using Popular Films for Theoretical Critique," 2(3)
- (16) "Symposium on Global Inequality and Teaching: Taking Up the Challenge of Craig N. Murphy's Presidential Address," 2(4)
- (18) Duffy, "Teaching with a Mallet: Conveying an Understanding of Systemic Perspectives on International Relations Intuitively- Croquet as Experimental Learning," 2(4)
- (23) Dougherty, "Comic Relief: Using Political Cartoons in the Classroom," 3(3)
- (29) Ba et al., "Making and Remaking the World for IR 101: A Resource for Teaching Social Constructivism in Introductory Classes," 4(1)
- (31) Nielsen et al., "Teaching Strategies and Security in Cyberspace: An Interdisciplinary Approach," 4(2)
- (32) Hall, "The Standing of International Law in Undergraduate IR Texts," 4(2)
- (34) Drainville, "Critical Pedagogy for Present Moment: Learning from the Avant-Garde to Teach Globalization from Experiences," 4(3)
- (37) Tickner, "Hearing Latin American Voices in International Relations Studies," 4(4)
- (38) Morgan, "Toward a Global Theory of Mind: The Potential Benefit of Presenting a Range of IR Theories through Active - Learning," 4(4)
- (40) Enterline, "Balancing Theory versus Fact, Stasis versus Change: A Look at Some Introduction to International Relations," 5(1)
- (43) Ishiyama et al., "Survey of International Studies Programs at Liberal Arts Colleges and University in the Midwest: Characteristics and Correlates," 5(2)
- (49) Asal, "Playing Games with International Relations," 6(3)
- (50) Webber, "Independence Day as a Cosmopolitan Moment: Teaching International Relations," 6(3)

-
- (51) Breuning et al., "Promise and Performance: An Evaluation of Journals in International Relations," 6(4)
- (53) Shinko, "Thinking, Doing and Writing International Relations Theory," 7(1)
- (55) Boyer et al., "Teaching Theories of International Political Economy from the Pit: a Simple In-Class Simulation," 7(1)
- (59) Erskine, "Teaching the Ethics of War: Applying Theory to 'Hard Cases'," 7(2)
- (61) Brown et al., "Consensus and Divergence in International Studies: Survey Evidence from 140 International Studies Curriculum Programs," 7(3)
- (62) Van Belle, "Dinosaurs and the Democratic Peace: Paleontological Lessons for Avoiding the Extinction of Theory in Political Science," 7(3)
-

付録2

番号	タイプ	所属機関 所在国	科目	対象学年	教育方法	教育内容	備考
1	A1:方法導入	米国	国際学一般	学部~院	ケース教材(事例に基づく教育)	国際貿易交渉(サンプル)	指南書・マニュアル
2	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部	PBL(問題発見・解決型教育)	国際関係の諸側面	指南書・マニュアル
3	A1:方法導入	米国	国際学	学部	シミュレーション+ロールプレイ	グローバル化(麻薬取引)	指南書・マニュアル
4	A1:方法導入	米国	国際関係論	院	IT+共同学習	政策決定・国際交渉	IT活用による共同学習
5	A1:方法導入 A3:特殊授業	米国	特別授業	学部	シミュレーション(模擬EU)	国際機構 (組織・政策決定過程)	米国・ヨーロッパ15大学で共同実施
6	A1:方法導入 A3:特殊授業	米国	政治学	学部(選抜)	特殊教材(Born to Rebel)の使用	調査研究方法(方法論)	ワシントンDCでのフィールドワークのための導入授業
7	B2:内容批判	カナダ	国際関係論	学部	FGM(女性生殖器切除)事例	国際関係論へのジェンダー論導入	教科書分析も含む
8	A1:方法導入	米国	国際学	学部	IT+PBL+シミュレーション	対外政策・国際交渉	ICONS 活用事例・学習効果の測定
9	A1:方法導入	イギリス	国際政治経済	学部1年	シミュレーション(教室内活動)	グローバル化	離れ小島・シアトルの戦い
10	A1:方法導入	米国	特設授業	1年+3年	映画	外交政策	2つの大学での夏期特設実験的授業
11	A3:特殊授業 B2:内容検討	イスラエル	国際コミュニケーション	非明示	通常	国際関係における文化の役割	イスラエルでの教育体験の紹介とそれに基づく考察
12	B2:内容検討	米国	国際政治経済	大学院	ケーススタディ	理論構築方法	定性分析の理論構築
13	A1:方法導入	米国	比較政治学	非明示	ケーススタディ	フロンティア研究	世界システム論に基づくケーススタディ
14	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部	シミュレーション(模擬国連)	国際機構(組織・政策決定過程)	教室内・授業内で行う模擬国連
15	B2:内容批判	イギリス	国際関係論	学部	映画	国際関係理論	国際関係理論を批判的に検討
16	A2:内容伝授	米国・英国	国際学一般	学部	「アクティブ・ラーニング」等	グローバルな格差問題	ISP編集者によるシンポジウム
17	A1:方法導入	米国	非特定	学部	IT+PBL	国際紛争に関する数量分析方法	ICB Libraryの活用
18	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部	クロッケー	国際関係理論(構造的リアリズム)	「芝生の上のビリヤード」を用いた導入
19	A1:方法導入	米国	国際関係論	社会人学生	アクティブ・ラーニング一般	国際関係論全般	社会人学生への教育:課題等の留意点
20	B2:内容検討	米国	国際学	学部	ディスカッション	授業での一人称呼使用の問題	国際問題を全て「アメリカ化」する危険検討
21	A1:方法導入	米国	比較政策学	3 4年	特殊教材(UNDP「人間開発レポート」)活用	グローバルな格差問題	HDI, GEM, GDI概念も習得
22	A1:方法導入	米国	米外交史	学部	特殊教材(回想録)の活用	外交政策	national war college での20年の授業体験
23	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部	特殊教材(コミック)活用	外交政策ほか	政治風刺コミックの活用例
24	A1:方法導入	米国	国際学	学部1年	シミュレーション	国際関係諸側面	国際人権条約締結のシミュレーション
25	A1:方法導入	イギリス	国際政治経済学	非特定	ケーススタディ	国際政治経済の理論的視座	教育事例としての世界経済フォーラム
26	A1:方法導入	米国	国際関係・個人研究	大学院	歴史的事例	研究方法	個人のリサーチにおいて、歴史的事例を扱う場合の留意点
27	A1:方法導入	米国	比較政治学	学部	シミュレーション	外国国内政治	模擬「ロシア連邦」
28	A3:特殊授業	米国	政治学・国際関係論	学部	学外体験学習(インターンシップ)	人権の国際化	アムネスティインターナショナル就業体験
29	A2:内容伝授	米国	国際関係論入門	学部1年	ケース教材	社会構成主義(constructivism)	社会構成主義(constructivism)
30	A1:方法導入	米国	ゼミナール	大学院	IT+共同学習+ロールプレイング	グローバル化	米国と南アフリカの院生 IT活用による共同学習の実験
31	A2:内容伝授 A3:特殊授業	米国	仮想空間戦略と政治	士官候補生(学部レベル)	ディスカッション+少人数教育・ゲストスピーカー	仮想空間内の安全保障	米国防務士官学校での授業紹介:他の教育機関での適用提言
32	B1:内容調査	米国	国際関係論	学部	教科書分析(国際関係論)	国際関係論における位置づけの検討	
33	A1:方法導入	米国	比較政治学	学部	映画	国家論	忠誠の対象としての国家の盛衰を映画で
34	B2:内容批判	カナダ	国際政治経済	学部~院	「歴史的アバンギャルド」手法	グローバル化	批判的教授法に基づく授業実践
35	C:調査研究	米国・トルコ	米外交論・国際政治	学部		トルコ人学生の米国へのイメージ調査	
36	A1:方法導入	米国	EU論	学部	シミュレーション(模擬EU)	国際機関	模擬EUの個別授業での実践報告
37	B1:内容調査	コロンビア	国際関係論	学部		ラテンアメリカにおける国際関係論の教育内容	(シラス)学術誌調査
38	A2:内容伝授	米国	国際関係論	学部	アクティブ・ラーニング一般	国際関係理論	抽象的なIR理論をわかりやすく教えるための技術紹介
39	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部1年	ロール・プレイング	PKO・外交政策決定過程	ロールプレイングの授業実践紹介
40	B1:内容調査	米国	国際関係論	学部1年		オーガンスキーの教科書を軸に、5冊のテキストの教科書分析	
41	A1:方法導入	米国	非特定	非特定	シミュレーション(模擬EU)	EUにおける投票制度	欧州理事会の特定多数決方式等
42	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部1年	ディベート	対外政策と倫理	武力行使・人道的介入、対ICC政策など
43	B1:内容調査	米国	国際学	学部		中西部66大学の国際関係学専攻カリキュラム内容調査	
44	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部	シミュレーション+ロールプレイング	グローバル化(チャド・バイライ)	20人ゼミ~150人講義
45	A3:授業紹介	米国	特設授業	学部	実地研修・体験学習	国際連合	夏期集中・国連実地研修
46	A1:方法導入	米国	国際機構論	不明	シミュレーション	国連安保理での意志決定	危機的状況における「模擬安保理」
47	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部上級	シミュレーション	国際交渉・紛争解決	ラオス・ベトナムでの導入事例
48	A1:方法導入	米国	国際学・国際問題	学部	IT(ウェブベース教材)	リサーチ指導・国際学全般	ウェブベースの教材研究
49	A2:内容伝授	米国	国際関係論	学部	シミュレーション+ゲーミング	国際関係理論	3つのシミュレーション・ゲーミング駆使
50	B2:内容検討	米国	国際関係論	学部入門	映画	国際関係理論	インディペンデンス・ディを使用・脱構築
51	B1:内容調査	米国	国際関係論		学会3誌(International Studies Quarterly, International Organization, World Politics)掲載論文の内容分析		
52	A1:方法導入	米国	アメリカ外交論	学部上級・院	IT(遠隔地教育)+ケーススタディ	ブッシュ政権外交	テレビ会議の活用
53	A1:方法導入	米国	現代国際政治	学部	体験型学習	国際関係理論	ディスカッション、WEBフォーラム、模擬会議
54	A1:方法導入 A3:特殊授業	米国	特設授業	学部	ロールプレイング	世界食糧問題	OXFAMのHunger Banquetへの参加
55	A1:方法導入	米国	国際政治経済	学部	特殊教材活用例	国際政治経済の理論的視座	カードゲーム(Pit)の活用
56	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部	シミュレーション	2レベルゲーム(対外政策決定論)	50分授業の想定・クラスサイズ自由
57	A1:方法導入	米国	国際法	学部上級	PBL(模擬裁判)	戦争犯罪・国際人道法	授業期間の3分の1・履修者数18
58	A1:方法導入	米国	国際関係論	学部入門	ディベート	国際問題・国際関係一般	具体的なアドバイス
59	A2:内容伝授	イギリス	戦争と倫理	学部2,3年	講義+ディスカッション+ケース教材	戦争における倫理的な問題とディレクタ	ヒロシマ・ナガサキ、イラク戦争、My Lai case、コンボ空爆、グアンタナモ
60	C:調査研究	レバノン				フロリダ大学607人学生を対象とした、アメリカ人学生の対「アラブ」イメージの調査	
61	B1:内容調査	米国				米国140大学の国際関係学(international studies)カリキュラムの調査	
62	B1:内容分析	米国				「民主的平和理論」を事例に、古生物学と政治学の理論比較	
63	A1:方法導入	米国	国際学	学部	シミュレーション	グローバル諸問題(環境、人口、武器拡散、女性)	global problems summit(模擬首脳会議)の有用性検証

